

中世イングランドにおける祝宴や食卓の行儀作法

—ノルベルト・エリアスの文明化論から「礼節 *cortaysy*」と「習わし *cynn*」を考える—

杏林大学 遠山菊夫

1 目的

ノルベルト・エリアスの『文明化の過程』を援用し、中世イングランドの資料に見られる祝宴や食卓での望ましい振舞い方に焦点を絞り、当時の人と人との結び付き方を詳らかにすることを旨とする。エリアスは、ルネサンス期に成立した「礼儀」という概念が18世紀後半に至り「文明化」に引き継がれてゆく過程を丹念に辿るといふ分析手法を取ったために、中世は後代の歴史的発展の出発点として位置付けられている。つまり、自己意識の表現形態としての近代的社交様式の祖を中世の「礼節」に求めたエリアスには、自己意識とは無関係な行儀作法という発想はあり得なかった。本報告の報告者は、11世紀以前の英語資料も視野に入れ、「礼節(中英語 *cortaysy*)」とは異質の「習わし(古英語 *cynn*)」という概念に注目し、人間の情感に関して中世前期と後期の間に大きな隔たりを認め、自己意識に依拠しない行動規範が中世アングロサクソン社会に存在したと想定できることを示したい。

2 方法

そこで、主な資料として、古英語の英雄叙事詩『ベオウルフ』(8~10世紀)と中英語の宮廷ロマンス『ガウェイン卿と緑の騎士』(14世紀後半)という頭韻による二つの韻文物語から祝宴や食事の場面を選び、比較しながら考察を行う。特に、登場人物の振舞い方、その振舞いがなされる空間、食卓に供されるものと使用される食器に注目して検討を加え、ラヤモン作『ブルート』(1200年頃)を含む他の中世頭韻詩から得た証拠でもって補強した上で、前期と後期では大きく異なる中世の行儀作法の背後にあるものを浮かび上がらせてゆく。最終的には、エリアスが中世イングランドに関して分析材料として引用している15世紀の脚韻詩形の行儀作法書の記述内容とも照らし合わせ結論を導く。

3 結果

古英語および中英語の原典に直接当たり分析した結果、前者に見られる祝宴の場面では、参加する人々を一括りの集団として強調する描写が目立つのに対して、後者の場合は、出席者一人ひとりを個々の存在として際立たせる表現上の態度が顕著であることが明らかになった。こうした結合性と個性の対照には、長椅子に朋輩と共に座し酒杯を重ねることを可とする共同体的武人社会と、召使が給仕する豊饒の食卓では何より席次が重要視される身分制騎士社会との隔たりが反映しているはずである。食事の前後には手を洗う、スプーンを使う、宴席に相応しい会話を楽しむ、という新しいテーブルマナーの登場は、他者に対する新しい情感構造を新しい社会が生み出した結果だと捉えられるのである。

4 結論

以上の議論から導き出せるのは、封建君主の宮廷という特定の社会的な場所で育まれた「礼節 *cortaysy*」が、既に14世紀後半のイングランドの人々の間に「情感の目に見えない壁」を築いていたという事実である。一方、11世紀以前には、むしろ身体的・心理的な近さを旨とする行儀作法が、集団的自我に立脚して成立していたことも明らかである。そもそもは血縁関係を基盤とする人間集団を指し示す語が、その意味する集団の範囲を本来の親族から部族、民族という延長線上で人類全体までに拡張させた上に、一門の仕来り、人の道、世の習いという意味合いで、人として望ましい振舞いをも表わすようになった結果が「習わし *cynn*」だと推測できるのだ。従って、行儀作法に関するこの概念は、親族もしくは部族という共同体的社会集団を前提とするものだと考えられるのである。

文献

- Elias, Norbert (1997 [1939]) *Über den Prozeß der Zivilisation: Soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.
- Tuan, Yi-Fu (1982) *Segmented Worlds and Self: Group Life and Individual Consciousness*. Minneapolis: University of Minnesota Press.